

「父」の姿が消えるとき

— “Bicycles, Muscles, Cigarettes”

矢ヶ部 あかり

序

80年代のアメリカ文学を考察する場合、周縁性、ジェンダー、家族、ヴェトナム戦争、消費文化等はしばしばキーワードとして挙げられる。雑誌『グラタ (GRANTA BOOKS)』は、1995年の家族をテーマとした特集 (“The Granta Book of the Family”) において、レイモンド・カーヴァー (Raymond Carver, 1938-1988) が父親について語ったエッセイ、“Where He Was: Memories of My Father” を掲載しているが、カーヴァーの描く小説もまた、「家族」をキーワードとして展開している。一般的な見方をすれば、家族は、男女が結婚し子供を儲けることで築かれる。カーヴァーの描く物語のほとんどは、アメリカのどこにでもあるような保守的な田舎町を舞台としているが、彼の作品に登場する家族もその例に漏れないものである。

カーヴァー作品の特徴の一つに、男性が女性に比して弱い存在として描かれるということがある。そのことについて、批評家カーク・ネセット (Kirk Nessel) は、“from beginning to end in Carver, men are by and large the weaker, more vulnerable species” (Nessel 51) と指摘しており、また、カーヴァー自身はジョン・アルトン (John Alton) とのインタビューで、“At least they [women] ’re more apt to survive” と、同様の見解を示している。さらに、女性を強い存在として描く傍らで、男性を “do get hit hard” な存在として描いているのは、“[men] can’t meet their responsibilities” (Conversations 165) であるからだと述べている。

アメリカの80年代は、50年代の家族の価値観を理想的だと謳った、非常に保守的な時代である。郊外に一戸建てのマイホームを構え、父が一家の稼ぎ手で、母は専業主婦という家族形態が、国民に推奨されたのである (岡村 181)。このような事実を考慮すれば、保守的な田舎町において、男性が「責

任」を果たせずに打ちひしがれることが、家族の崩壊につながりかねない重要な問題となるであろうことは予想するに易い。実際、カーヴァーの描く家族は多々にして崩壊し、その原因はアルコールにあると指摘する論文も多い（カーヴァーの作品でアルコール中毒になるのは大抵男性である）。また、千石英世は「パシフィック・ノースウェストの風—死／父／土地の気配」において、カーヴァーをリチャード・ブローティガン（Richard Brautigan）と共に、「父なきアメリカを描いた作家」だと指摘している（184）。千石が基本テキストとしているのは、“The Third Thing That Killed My Father Off”であるが、上記の指摘は、カーヴァーの作品全体にあてはまることだとして論を進めている。千石が、父親が一家を統括する力ある存在として不能となっていく過程に注目していることを考えれば、彼の意味する父は当時理想的だとされた父、つまり、威厳があって何事にも屈することのない、権威者としての父親であると解釈できよう。威厳や強さといった要素は、父権社会において、父親が持つべき父性として期待されるものであり、また家族の大黒柱としてそれらの要素を備えておくことが父親の責任である。カーヴァーの作品において、父親が権威者として機能しなくなるということは、従来父性と謳われてきたものが無効になるということの意味する。

「父権の喪失」は、80年代のアメリカ文学の特徴であると考えられているが、80年代には、父親を不在とした物語が多く描かれている。¹このような事態は、回想録においても同じであるらしく、チャールズ・バクスター（Charles Baxter）は、*The Business of Memory* の中でこのように述べている。

… recent memoirs seem to have reserved a special place for missing or empty or vacated or just bad fathers. Something has gone wrong with the fathers; there is something either shameful or absent about them. (152)

また、1970年代後半から現在に至るまでの回想録について、スヴェン・パークーツ（Sven Birkerts）は、回想録に述べられるのはもはやエディプス・コンプレックスのような父親に対する意思の葛藤ではなく、“all of the absent, elusive, confoundingly inaccessible fathers”（Birkerts 84）であると述べている。これらの特徴は、カーヴァーの作品に登場する父親に、見事に当てはまるものである。

本稿では、“Bicycles, Muscles, Cigarettes”をテキストとして扱う。この作品は、機能しない父親の姿を多く描くカーヴァーの作品の中にあって、例外的に父親が父親として成立した作品だと評されている。²しかし、このような解釈は、父親を、力を持った存在、つまり従来の父性を備えた存在として捉えた場合にのみもたらされるもので、はたして、その父性が有効であるかどうかまでを考慮した解釈ではない。また、80年代という時代と父親不在という特徴の呼応関係を考えれば、文学作品を、社会的なテキストを配慮せずして読み込むことは、無理があると思われる。ここでは、社会的背景を踏まえながら、“Bicycles, Muscles, Cigarettes”における父親の姿に焦点を当て、「父性」が喪失していく過程を考察する。

1. “Bicycles, Muscles, Cigarettes”：3つの単語の並列が示すもの

カーヴァーの作品が、“Cathedral”を機に変化したことはよく知られている。“Cathedral”以前の作品では希望の無い陰鬱とした世界が描かれるのに対し、それ以降の作品には、希望が叶うか否かは不明ではあるものの、前向きに生きようとする人間の姿が描かれている。“Bicycles, Muscles, Cigarettes”は、“Cathedral”以前に書かれた作品である。しかしこの作品は、初期の作品の中では例外的に、生に対して実に前向きな作品だと捉えられる傾向がある。アーサー・ザルツマン (Arthur Saltzman) は、“Bicycles, Muscles, Cigarettes’ exhibits a tenderness and a cautious but compelling hopefulness that are rare in Carver’s debut collection” (62) と述べており、アーサー・F・ベシア (Arthur F. Bethea) は、父親は禁煙に成功し息子は成長する物語だ、と肯定的に解釈している (Bethea 83)。

物語は、随所に追憶を織り込むことで、実際に登場する父親と息子だけではなく、祖父も含めたハミルトン家の3世代に亘る男性について語っている。「自転車」、「筋肉」、「煙草」は、それぞれ「息子」、「父親」、「祖父」を表象する品物として用いられているのだが³、タイトルは、“Bicycles, Muscles, Cigarettes”と複数形で表されている。物語で実際に描かれているのはハミルトン家の3世代の男性ではあるが、ここでは、物語と社会背景の関わりを考慮し、“Bicycles, Muscles, Cigarettes”というタイトルを、より一般的な意味での「息子たち」、「父親たち」、そして「祖父たち」を示唆したものと解釈して議論を進めていく。

ハミルトン一家は核家族で、家があるのは郊外という設定の、典型的なアメリカの家族である。カーヴァーの他の作品と比べると、一家の夫婦、親子間のコミュニケーションは密で、禁煙中である父親のイヴァン (Evan) はアルコール中毒ではない。一見すれば、幸せそうなアメリカン・ファミリーを絵に描いたかのような家族である。カーヴァーの描く家族が、大抵、コミュニケーションの不成立か、父親のアルコール中毒が原因で崩壊するのが典型的なパターンであることを考えれば、他批評にあるように、“Bicycles, Muscles, Cigarettes” を例外的に前向きな物語だと捉えたとしても不思議ではない。しかし、物語は短絡的にそうだと結論できない複雑さを秘めている。

物語の初頭、彼の妻アン (Ann) は、禁煙中のイヴァンに以下のように声をかける—“if it’s any consolation, the second day is always the hardest. The third day is hard, too, of course, but from then on, if you can stay with it that long, you’re over the hump” (21)。ベシアは、このアンの台詞の3という数字の言及を、キリストの復活と等位に捉え、そこに物語の前向きな方向性を見ている(82)。しかし、ここでは「自転車」、「筋肉」、「煙草」の表象のされ方に考慮して、数字の意味を考えるべきであろう。素直に考えれば、アンの台詞は一般的な意味での禁煙の辛さを語ったものである。禁煙2日目が一番辛いというのはよく知られたことだ。けれども、各世代を表象する「自転車」、「筋肉」、「煙草」の中で、「自転車」を除いた2つは、密接した関係を持った等位な品物として描かれており、後の考察に分かることであるが、それらはイヴァンが断ち切りたいと願う父性を表象したものであることに注目すれば、彼が、禁煙と合わせて二重の「断ち切る」苦しみを味わわされていることに気がつく。つまり、ハミルトン家の3世代の中で、2世代目のイヴァンが最大の窮地に立たされていると考えることができるのである。

“Bicycles, Muscles, Cigarettes” は、1976年に出版された、*Will You Please Be Quiet, Please?* に収められている。1976年は、1960年から15年続いたヴェトナム戦争が終結した翌年である。物語がいつの時代を舞台として描かれているかは明記されていない。しかし、カーヴァーが“Write about the things you know about” (Hallett 44) を、小説を書くに当たっての信条としていることを念頭に置き、物語がヴェトナム戦争期のことを描いたものだと仮定すれば、戦争参加の有無は別としても、イヴァンは何らかの形でヴェトナム戦争期を経た世代であると考えることができる。同じように、祖父は第二

次世界大戦期を経た世代であると推測され、息子のロジャーは (Roger)、次世代の男性だということになる。2章では、複数形のタイトルが示唆する一般性を考慮し、父の世代と祖父の世代が「筋肉」と「煙草」の2つの品物を共有しているにもかかわらず、なぜイヴァンだけがそれを断ち切る苦しさを味わわなければならないのかを、2世代間の社会状況を比較することで考察する。

2. 質の異なる2つの戦争

第二次世界大戦へのアメリカ参戦の目的は、ドイツのナチズムと日本の軍国主義の打倒にあった。アメリカは、それまで大恐慌がもたらした悲惨な状況を引きずっていたが、参戦を境に状況は激変する。軍需産業が盛んになったおかげで大恐慌は終結、たちまちのうちに景気は好転し、アメリカは物質的に豊かな国となったのである (Bradbury 158)。それだけではない。戦争に参加した男たちは G.I. ビルの支給によって大学へ通い、その後の高収入で安定した未来が約束されたのである。新しく機会が与えられ、生活様式が、従来考えられてきた安定した家庭のそれを超えたものになるに従い、1960年までには、平均的なアメリカの家族は5年に一度は新しい住居へと引越しをするまでになっている (*The Norton Anthology of American Literature* 1130)。このようにして、郊外に居を構える核家族という形態が、アメリカの家庭のスタンダードとなった。世界大戦に勝利したアメリカは、以後自由主義世界の指導者として君臨し、世界の正義、世界の警察として認識されることになる。「強きアメリカ」はこうして始まったのである。

しかし、ヴェトナム戦争は違った。アメリカは、北ヴェトナムと南ヴェトナム解放民族戦線に対し、南ヴェトナム政府を援助する形で参戦した。一応の大義名分は、悪の権化である共産主義に脅かされているアジアの小国を護ることであった。しかし国民は、この大義名分を理解することができず、戦争に対して腑に落ちない感情を抱いていた。そのことは、ヴェトナム戦争について描かれた数々の作品に明らかである。例えば、ティム・オブライエン (Tim O'Brien) の *The Things They Carried* では、個人レベルでの軍人たちの気持ちだが、オムニバス形式で語られる。⁴中でも、作家と同じ名前の青年が語り手となっている “On the Rainy River” では、青年がこのような独白をする。

... the American war in Vietnam seemed to me wrong. Certain blood was being shed for uncertain reasons. I saw no unity of purpose, no consensus on matters of philosophy or history or law. The very facts were shrouded in uncertainty ... America was divided on these and thousand other issues, and the debate had spilled out across the floor of the United States Senate and into the streets, and smart men in pinstripes could not agree on even the most fundamental matters of public policy. (40)

青年の言葉から分かるように、戦争の目的は得体が知れず、国民に理解できるものではなかったのである。ヴェトナム戦争に出かけた兵士は、士気を失い麻薬に溺れたと言われているが、それは、ジャングルで敵が見えないというフラストレーションに加え、戦争の大義すらも見えないということが拍車をかけたからである。戦争への疑惑を持った国民は、ノーム・チョムスキー (Noam Chomsky) が、「あまりにも多くの人が、本当の事情に気づきはじめていたのだ」と言うように、次第に戦争の事実に気づき、反戦運動を起こすようになる (38)。結果、政府は事実の捏造に走っており、チョムスキーの「国民に提示される世界像は現実とは似ても似つかぬものだ」という指摘は、否定できない事実である。しかし、反戦運動は、「力は正義なり (might is right)」を指針として他国の争いに介入する、アメリカの対共産主義という戦争の大義名分の崩壊を示す、重要な出来事であったと考えることができるだろう。戦場の兵士が、理解しがたい大義に士気を喪失したことも、そのことを示唆している。第二次世界大戦で賞賛された「(暴)力」の神話が崩壊したのは、国家レベルで暴力を行使するための納得のいく理由を示すことができなかつたことのみ認められることではない。戦場においても、ヴェトナム戦争はアメリカ初の負け戦となった。つまり、大義の崩壊と解決策としての暴力の無効性が、イヴァンの世代の特徴だと考えられるのである。このように、アメリカが関わった2つの世界規模の戦争は、国民に与えた影響という意味では、その質を全く異にするものだったのである。3章では、社会的な側面が、実際に物語にどのように取り込まれているのかを考察する。

3. 大義と (暴) 力の無効性

“Bicycles, Muscles, Cigarettes” において、イヴァンは息子のロジャー

(Roger) が起こしたとされる問題に巻き込まれる。ロジャーが、友達の自転車を借りた拳句に失くしたという疑いをかけられたからだ。イヴァンは親としての責任から話し合いに臨む。そう決意するまでの経緯は以下のように描かれる。

“It sounds like it’s just a childish argument, and the boy’s mother is getting herself involved.”

Do you want me to go?” Ann Hamilton asked.

He thought for a minute. “Yes, I’d rather you went, but I’ll go. Just hold dinner until we’re back. We shouldn’t be long.” (22)

イヴァンが話し合いをしに出かけた相手は、息子の友達ギルバート (Gilbert) の母親である。イヴァンは、アンが行った方がよいとしながらも、自分が話し合いに出かける。アンは家において、彼らが戻ってから食べられるように夕食を用意しておけばよい。イヴァンとロジャーが帰宅する際、イヴァンは通りから見える窓の灯りに気持ちが高まっており、ロジャーは「ママ、ママ」と叫びながら家の中に駆け込んでいる (30)。そして、台所には温かい夕食が用意されている (31)。ハミルトン家において、妻は夫子どもが安心して帰ることのできる場所を提供する存在であって、子どもの問題に決着をつけるのは、父親であるイヴァンの責任なのである。

さて、イヴァンが臨んだ話し合いは、バーマン (Mr. Berman) の登場によって、暴力的結末をむかえる。バーマンは、ロジャーと同じ疑惑をかけられた少年、ゲイリー (Gary) の父親である。“A stiff-shouldered man with a crew haircut and sharp gray eyes” (26)、と表される外見は、まるで軍人のようである。バーマンの口調は命令口調で、問題についても他人の意見に耳を貸すことは無い。途中、バーマンが息子と2人でコソコソと密談する場面があるが、彼の場合、話し合いの場に公平さは必要とされない。話は身内のみで進めればよいのであり、外部からの声は無視、あるいは抑圧してしまえばよいものなのである。イヴァンは、バーマンの密談の光景に対し、“He had the feeling he should stop them, this secrecy” (27) と感じているが、これは、イヴァンの感情と同時に、イヴァン世代の国民たちの感情を表しているように思われる。軍人のような外見をした父とその息子が生み出す空気は、実に

不透明で怪しげであるが、これは、ヴェトナム戦争やウォーターゲート事件によって国民を不安な状況に陥れた、物語の書かれた当時の社会状況を彷彿とさせるものだ。まるで力のシンボルのようなバーマンは、軍や政府といった、国家の力を表象していると考えられるのである。子どもの問題に首を突っ込む父親の姿は、アジアの小国の問題に、まるで自国が世界の警察であるかのように介入したアメリカの姿をイメージさせる。

イヴァンは、バーマン家の男2人が密談する光景に対して抱いた不気味な感情を抑えようと、ポケットに手を伸ばし煙草を取ろうとする。禁煙中の彼のポケットに煙草はあるはずもなく、彼は代わりに手のひらの煙草の臭いを嗅ごうとする。煙草は、彼の父親が吸っていたものであり、この物語においては祖父の世代を象徴する品物となっている。イヴァンの手のひらの臭いを嗅ぐという行為は、まるで父親からの助けを求めているかのような印象を与える。しかし、イヴァンにバーマン親子の密談を止めることはできない。むしろ、彼らにロジャーを侮辱されたことをきっかけに、バーマンと殴りあいの喧嘩を起こしてしまう。これは、イヴァンが煙草の臭いを嗅ぎ、父の力を取り入れたことによって、力による問題解決に進んだと見ることができるだろう。しかし、彼にとって煙草が断ちたいものであることを考えれば、この解決法は、イヴァンが求めるものではないということになる。第二次世界大戦期を経たイヴァンの父親の世代は、正義という大義名分を力の勝利という形で実行することができた。⁵力で正義を示すということが、父親の世代では成立するのである。しかし、G.P. ラインズベリー (G.P. Lainsbury) が、“A father’s attempt to take part in a rational resolution to a problem involving ideals of justice and retribution has deteriorated into clan conflict” (108) と述べていることから分かるように、第二次世界大戦では通用した問題解決の試みが、イヴァンの世代では通用しない。⁶このことは、大義と力で成り立つ父性が、効力を喪失したからだと考えることができるだろう。物語の末、彼の手のひらにもはや煙草の臭いがしないことは、そのことを象徴的に表している。

結局問題に決着はつかぬまま、イヴァンとロジャーは家路につく。帰り道に、イヴァンは “I’m sorry you had to see something like that” (30) と息子に謝っている。また、ロジャーに筋肉に触れていいかと尋ねられても断っており、家にも入らずぼんやりとポーチに座り、以下のような父親の姿を回想している。

He had once seen his father—a pale, slow talking man with slumped shoulders — in something like this. It was a bad one, and both men had been hurt. It had happened in a café. The other man was a farmhand. Hamilton had loved his father and could recall many things about him. But now he recalled his father’s one fistfight as if it were all there was to the man. (31)

彼が思い出す父の姿は、暴力に彩られたもののみである。

父に付随する(暴)力の要素、それはイヴァンが断ち切りたく思っているものであり、それは禁煙に含意される形で表されていた。物語の初め、イヴァンはこのようなことを言う—“For three days after I stopped I could smell it on me. Even when I got out of the bath. It’s disgusting” (21)。世代ごとの表象にあてはめれば、煙草はイヴァンの父親世代を表すものである。ラインズベリーは、上のイヴァンの回想を、“Hamilton’s violent outburst has forged another link in a chain of violence which connects at least three generations of Hamilton men” (108) と述べているが、煙草もまたハミルトン家の男たちをつなぐ品物である。しかし、(暴)力を表す筋肉も煙草も、3世代をつないでいるわけではない。前に述べたように、「筋肉」と「煙草」は作中での機能の仕方としては共に等位であり、祖父と父の2世代をつなぐものだと考えられるが、「自転車」はそれらとつながってはいない。メタフォリカルに考えれば、煙草を止めるということは、男たちを繋ぐ鎖を断ち切るということである。イヴァンは、祖父の代の表象である煙草を止めることで、祖父の代から付与されてきた「力という父性」を断ち切ろうとしているのである。だからこそ、(暴)力の象徴であるバーマンに対面した際に、発作的に父の力を取り込もうとして手のひらに“disgusting”であるはずの煙草の臭いを嗅ぎ、力の爆発を息子に見せてしまったことを悔やまねばならないのである。

以上をまとめれば、“Bicycles, Muscles, Cigarettes”において、ロジャーが失くした自転車事件がもたらしたのは、「力で正義を実現する」ことが無効になってしまったことの認識である。それらは、従来「父性」として捉えられてきているもので、立派な父親であれば備え持つべき特質と考えられているものだ。しかし、現代の批評家たちはこれまで、それらの特質を喪失されたものとして議論してきている。彼らの議論が活発に交わされるようになったのは、多々にして1960年以降のことであるが、それは、アメリカがヴェト

ナム戦争で敗北したことによって、力で示されるパックス・アメリカナの無効性が露見したことと無関係ではあるまい。“Bicycles, Muscles, Cigarettes”において、カーヴァーは3世代の男たちを登場させ、抽出話法を用いてイヴァンを焦点人物とすることで、ヴェトナム戦争で無効であることが明るみになった特質、つまり、「父性の喪失」を、間接的に示しているのである。

4. 父権の代替となりうるもの

この章では、喪失した「父性」の代替となるものがあるのか否か、あれば一体それは何であるのかについて考察する。物語の最後で、イヴァンはロジャーの部屋のドアを半分だけ閉めている。このことについて、ベシアのように、子どもの急速な成長を心配する親が、成長の過程を少しでも遅らせようと願ってのものだと考える批評家もいれば(83)、ザルツマンのように、“Hamilton’s compassion leavens the painful process of growing up; it also confers upon this father an exalted status in Carver’s world” (65) と、大人の世界へと向かう息子の成長の痛みを和らげようとする、父親の情けと捉える批評家もいる。しかし、これらは全て、ハミルトン家の父と息子の関係を、従来どおりの父子の関係、つまり、教え導く父と導かれる息子の関係で捉えた場合の解釈であり、父親というものに関するイヴァンの葛藤を考慮したものではない。むしろここでは、なぜイヴァンがロジャーに筋肉を触れさせなかったのか、彼がロジャーと交わした会話がどのようなものであったのかをより配慮すべきであろう。

イヴァンが家の中へと入り、ロジャーの部屋へ「おやすみ」を言いに行った際の様子は、以下のように表される— “He [Roger] was in his pajamas and had a warm fresh smell about him that Hamilton breathed deeply” (31)。これは、まるでイヴァンがロジャーを自分に取り込んでいるかのようなのである。臭いを吸い込む場面の登場はこれで2度目だが、この場合は意味合いが異なる。煙草の臭いを嗅ぐ際は、力による助けを求めるためであったが、今回は、愛しい息子の存在を確認するためであると同時に、父親が息子の立場に下りて行くための手段であるように思われる。事実、この後彼は息子として父親を想起している。けれども、イヴァンが見出すのは、ロジャーとの間の、父親というものに対する気持ちの齟齬である。ロジャーは、“Dad, was Grandfather strong like you? When he was your age,” “Did he[Grandfather] smoke?” (32) と

イヴァンに尋ねるが、これらの言葉は、強き父への息子の憧れを示すものであると考えられる。しかし、力の象徴としての強き父親像は、イヴァンが無意識的に違和感を覚え、踏襲したくは無いと願うものである。つまり、イヴァンは、筋肉に触れてよいかと尋ねるロジャーの行為に加え、さらにこの質問によって、彼らの理想とする父親が、質を全く異にしたものであることを感知させられるのである。

また、ロジャーはイヴァンに以下のように告げている。

“Dad? You’ll think I’m pretty crazy, but I wish I’d known you when you were little. I mean, about as old as I am right now. I don’t know how to say it, but I’m lonesome about it. It’s like—it’s like I miss you already if I think about it now. That’s pretty crazy, isn’t it? Anyway, please leave the door open.” (33)

「自転車」は子どもの領域であり、「煙草」と「筋肉」は大人の領域である。ロジャーは今回の自転車紛失事件によって、未だに力で問題を解決しようとする大人の姿を目の当たりにする。しかし、彼がイヴァンの筋肉に触れたがることや、祖父がイヴァンと同じように強かったのかを確認しようとすることから分かるように、ロジャーは筋肉に象徴される強さに憧れ、自分も強い父親になりたいと憧れこそすれ、嫌悪感は抱いてはいない。むしろ、力が真の解決を導かない無効なものだと感じ、大義と（暴）力の世界を避けようとしているのはイヴァンである。ロジャーの言葉は、単純に父親が自分と同じ年頃であればと、父親を友だちとして欲する、少年ならではのものであろう。しかし、大義と（暴）力の連鎖を断ち切りたいと感じているイヴァンにとっては、この言葉が、「煙草」も「筋肉」も無い世界を求める、ロジャーの気持ちを表しているかのように聞こえたとしても不思議ではない。つまり、半分だけ閉じられたドアは、イヴァンがロジャーの言動によって感じさせられた、父親というものに関する気持ちの齟齬を表していると考えられるのである。現時点での彼らの関係は、完全に閉じられたドアのように遮断されてはいない。しかし、父親に求める父性ということに関しては、彼らの間には既に大きな隔たりが存在するのである。

では、失われた父性、機能しない従来之父と息子の関係の代替となりうるものは何であるのか。“Bicycles, Muscles, Cigarettes”の中で、それは明確に

示されてはいない。おそらく考えられるのは、うちひしがれた男たちに安心を与えたアンの存在と、イヴァンの過去を見直すという行為であろう。この物語で、ロジャーに不安を与えなかったのは、唯一母親であるアンである。また、ポーチの上で父親を回顧するイヴァンを、まるで息子を慰めるかのように両腕で包み込むのもアンである。彼女は、典型的な母性を体現したような女性であるが、彼女の女性性は、喪失された父性の特質と全く異なるものである。また、イヴァンの、ロジャーの臭いを吸い込み、息子の立場で父親を回想するという行為は、彼に父親というものについて更に考えさせる機会を与えている。過去の回顧という行為が社会レベルで行われる場合、それは歴史を顧みるということだけではなく、回顧によって発見された新しい史実を盛り込んで（あるいは新しい視点から）過去を再考する、つまり見直しをする作業も含まれる。⁷女性性と過去の見直し、これらが“Bicycles, Muscles, Cigarettes”においては、失われた父性の穴埋めの効果をもたらしていると考えられるのである。

結論

以上、“Bicycles, Muscles, Cigarettes”を「父性が無効となる過程」に焦点を当てることで考察してきた。カーヴァーの作品は社会的でも政治的でも無いと言われ、ありふれた普通の人間の生活を描いているために、これまで、ある種の批評家から、K マート・リアリズム、ダーティー・リアリズムなどと侮蔑的な形容のされ方をしてきた。カーヴァーは、自身がしばしば語ったように、作品の中にテーマを持ち込むことは無い。また、彼が自然主義の小説を苦手としていることも関係してか、小説に社会性をおもむろに描き出すこともない。カーヴァーの語り口は、実に静かで淡々としている。けれども、今回の考察によって浮かび上がったのは、その淡々とした描写の中に存在する、従来の父性の喪失という社会の状況である。このことは、彼の作品が社会を映し出したものであることを意味している。⁸ただし、それは作品に特定の視座を与えた場合にもたらされた特定の結果であり、また解釈に過ぎない。今回の“Bicycles, Muscles, Cigarettes”の解釈は、これまでの批評とは異なるものであるが、それは、言葉で感情を表現することが不得手な父親の姿に目を向け、周囲の情景描写に彼の声を探そうとした結果である。カーヴァーの語り口は、彼が描く人間たちのそれ同様もの静かであり、主体性を

持って我先にと語ろうとしない。しかし、このことは、彼の作品が、読者がどのような視点を据えるかによって幾様にも解釈され得る可能性を秘めた、解釈という行為において寛容なものであることを示している。今回の考察は、その一つの例証にすぎない。

80年代以降、「父権の喪失」と言われて久しいが、その代替となるものがあるのかどうか、いまだ不明である。今回、カーヴァーの描いた13ページ程度の小さな作品の中に、「従来の父性の無効性」の問題を確認したことは、社会性という意味において、彼の作品を考察する上での更なる可能性を示すこととなった。今後、彼の作品とそれ以降の作家の作品の中に父性の喪失の問題を見つめることは、無効となった父性のオルタナティブの探索という、現代社会が必要とする新たな課題の遂行となると言えるだろう。

- 1 カーヴァーと同じくミニマリズムの作家として扱われるボビー・アン・メイソン (Bobbie Ann Mason) の *In Country* (1985)、ポール・オースター (Paul Auster) の *Moon Palace* (1989)、ルイズ・アードリック (Louise Erdrich) の *Love Medicine* (1984) などは、80年代に出版された作品である。ヴェトナム戦争や現代のネイティブ・アメリカンという、特定の状況に焦点を当てて描いた作品はあるものの、3作品のどれもが父親を不在、あるいは機能しなくなっていく存在として描いている。
- 2 物語の最後で、父親が息子の部屋のドアを半分閉める場面があるが、ザルツマンは、その行為を父の息子に対する思いやりだと解釈し、“it [compassion] also confers upon this father an exalted status in Carver’s world” (65) と述べている。
- 3 自転車を失うのが息子、息子の巻き込まれた問題の解決に、結局は力を用いてしまうのが父親、そして孫のロジャーに煙草を吸う姿を記憶されているのが祖父である。
- 4 オブライエンは、ヴェトナム戦争に参戦した経験のある作家である。彼の作品には、ヴェトナム戦争を扱ったものが多いが、従来の戦争小説に見受けられるような、ヒーローとしての兵士は登場しない。
- 5 人間の倫理として考えれば、戦争に大義名分はあろうはずもない。
- 6 イヴァンと同世代であるバーマンは、1世代前のまま力で父性をあらわしているが、前述したように、彼が国家の力を表象していると考えれば、アメリカがヴェトナムで敗戦したことは、力であらわす彼の父性が無効であることを示していることになる。

- 7 女性が、歴史は“his story”つまり、男性が記述して残したものであるとして、新たな視点から歴史を見直したことは、この顕著な例である。
- 8 カーヴァーの作品が政治的ではないとされることについて、ヴァネッサ・ホール (Vanessa Hall) はこのように述べている— “if Carver espouses no ‘over politics’ in his stories, his sensitivity to the female condition turns them into ‘a valuable mirror of contemporaneous discourse on masculinity and femininity’ in the 70s and 80s” (qtd. in Fabre-Clark 7)。彼女の指摘は、カーヴァーの作品のフェミニズム的側面についてのものだが、カーヴァーの作品が社会を映し出していることは、フェミニズムに限られたことではない。

Bibliography

テキスト

Carver, Raymond. “Bicycles, Muscles, Cigarettes” *Where I’m Calling From: Selected Stories*. New York: First Vintage Contemporaries, 1989.

参考文献

Baxter, Charles. *The Business of Memory: The Art of Remembering in an Age of Forgetting*. Saint Paul, Minnesota: Graywolf Press, 1999.

Baym, Nina ed. *The Norton Anthology of American Literature*. NY: W.W. Norton & Company Ltd., 2008.

Bethea, Arthur F. *Techniques and Sensibility in the Fiction of Raymond Carver*. New York: Routledge, 2001.

Birkerts, Sven. *The Art of Time in Memoir: Then, Again*. Saint Paul, Minnesota: Graywolf Press, 2008.

Bradbury, Malcolm. *The Modern American Novel Second Edition*. New York: Oxford University Press, 1992.

Carver, Raymond. “Where He Was: Memories of My Father” *The Granta Book of the Family*. NY: Granta Books, 1995.

Fabre-Clark, Clair. “Introduction to Special Issue on Carver and Feminism” *The Raymond Carver Review* 2. Spring 2009
 <<http://dept.kent.edu/english/RCR/issues/02/index.html>>.

Gentry, Marshall Bruce, and William L. Stull, eds. *Conversation with Raymond Carver*. Jackson: Mississippi UP, 1990.

- Hallett, Cynthia Whitney. *Minimalism and the Short Story: Raymond Carver, Amy Hempel, and Mary Robinson*. Lewiston, N.Y.: The Edwin Mellen P, 1999.
- Lainsbury, G. P. *The Carver Chronotope: Inside the Life-World of Raymond Carver's Fiction*. New York: Routledge, 2004.
- Nesset, Kirk. *The Stories of Raymond Carver: A Critical Study*. Athens: Ohio UP, 1995.
- O'Brien, Tim. *The Things They Carried*. Broadway, NY: Broadway Books, 1998.
- Saltzman, Arthur. *Understanding Raymond Carver*. Columbia: U of South Carolina P, 1988.
- 岡村ひとみ 「第二派フェミニズムへの鼓動」『概説 フェミニズム思想史』奥山 暁子、秋山洋子、支倉寿子編著 ミネルヴァ書房 2003.
- 千石英世 「パシフィック・ノースウェストの風 - 死／父／土地の気配」『ユリイカ』1990年6月号、180-91頁.
- チョムスキー、ノーム 『メディア・コントロールー正義なき民主主義と国際社会』 集英社新書 2003.